２０２５年３月９日（日）　　於札幌発寒教会

「人には出来ぬが、神には出来る」

（ルカによる福音書１８：１８～３０、ヨブ記４２：１～８）

今朝は、一般に「富める青年」と言われて、教会人の間で、よく話題にされるルカによる福音書１８章１８節から３０節までの箇所が、説教のテキストになります。ところが、この個所の小見出しが、「金持ちの議員」となっていることから明らかなように、ここに出て来るのは、金持であることには変わりないのですが、必ずしも青年とは限らず、寧ろ、議員と言われているのですから、その地位に相応しく、ある程度、齢を取った人物が想定されるのです。既に、自分の死について考え始めているのですから、或いはひょっとして、可成りの高齢者であったのかも知れません。議員とは何を指すのか、地方議会の議員とも考えられますが、或いは、ユダヤ最高法院・サンヘドリンの議員であったのかも知れません。兎に角、彼にはお金ばかりでなく、地位も名誉もあったのです。この世的に見れば、誰もが羨むほどに、あらゆるものに、もう十分に満たされていたのです。でも、彼には、尚一つ不安があったのです。それは、死んだらどうなるのか、と言う、死後の問題でした。この世の宝は十分過ぎる程あるのですから、何も案ずることはないのですが、しかし、そんな彼にも、死は必ずやって来るのです。金持ちだから、地位があるから、名誉もあるから、と言って、死は彼を避けて通り過ぎてはくれないのです。死は、この点、真に平等です。そのことを思うと、彼は、どうしても不安を覚えざるを得なかったのです。

そこで彼は、主イエスに近づき、問い掛けたのです。「善い先生、何をすれば永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」と。主イエスは、彼に対し、直ちに答えられはしました。が、しかし、先ず、「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもいない」と言って、窘（たしな）められました。恐らく、この議員は、主イエスのことを、ユダヤ教のラビの一人のようにしか考えていなかったのでしょう。そして、主イエスから、気休めでもいいから、「永遠の命を保証する」と言うような、お墨付きの言葉を期待したのでしょう。主イエスに対する、「善い先生」と言う、彼の呼び掛けには、一種の阿（おもね）りの響きがあります。主イエスは、咄嗟に、それを感じ取られたものと思われます。そこで主イエスは、「神おひとりのほかに、善い者はだれもいない」と言って、御自身ではなく、真っ直ぐに神を見ることを、彼に促されたのです。もし彼が、真っ直ぐに神を見ていれば、この後彼が平然と口にする、「そういうこと（とは、つまり、神の戒ですが）はみな、子供の時から守ってきました」などと言ったような驕ったことは、とても恥ずかしくて言えなかったでしょう。神は、隠された心までも見透かされるお方なのですから、形式的に戒めを守ったとしても、心がそこになかったならば、或いは、心が実際には反対を向いていたならば、守らないのと同じだからです。

少し、話が先に進み過ぎましたが、また、話を元に戻して、彼（か）の議員が、主イエスに、「何をすれば永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」と、尋ねたのに対して、主イエスは、「姦淫するな、殺すな、盗むな、偽証するな、父母を敬え」と言う、モーセの十戒の、本来のものとは順序不同なのですが、第五戒以下の五つの戒を示されました。すると彼は、すぐさま、先程も言った通り、「そういうことはみな、子供の時から守ってきした」と答えたのです。果たして、そうでしょうか。ここには、第十戒の、「あなたは貪ってはならない」と言う戒めは抜けていますが、それが十戒の中に入っていることは、彼は十

分に承知していたはずです。主イエスが、敢えて、この戒めを落とされたのか、これをも含めて、前の五つの戒に、モーセの十戒を代表させられたのか、よくは分かりませんが、「それらは全部守って来ました」と彼が言った時、彼の意識の中には、この戒も入っていたのは、間違いありません。だとすれば、彼は、本気で、或いは、真顔で、「汝、貪るなかれ」と言う、モーセの十戒の第十戒を守って来たと、言える資格などあったのでしょうか。守らなかったからこそ、つまり、これまで大いに貪って来たからこそ、彼は、大金持ちになり得たのではないでしょうか。また、今日（こんにち）の高い地位にも就けたのではないでしょうか。彼は、甚だ自己認識が甘いのです。しかも、人間の手で、永遠の命が得られるものと、考え違いをしているのです。そんな彼の蒙を覚まし、自己認識の甘さに気付かせるため、主イエスは、彼の自信を根底から覆し、全身を震撼させるようなことを言われました。２２節です。

「あなたに欠けているものがまだ一つある。持っている物をすべて売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい」。確かに、厳しい言葉ではありますが、冷静に考えれば、何も特別なことではなく、主イエスは、極めて当然のことを言われたまでのことなのです。と言うのは、永遠の命とは、主イエス・キリストを信じ、受け入れ、従う以外のことではないからです。小福音書と呼ばれるヨハネによる福音書３章１６節に、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」と、言われている通りなのです。更に、彼がどんなに多くの富を持っていても、最後、死ぬ時には、何も持っては行けないのです。裸一つで行くことになるのです。ならば、行った先の天国で、貧相な姿を晒すよりも、生きている間に、全財産を用いて、人々に、特に、貧しい人々に憐みを施し、天に宝を積んでおく方が、どれだけ賢いか、ちょっと考えれば、誰にだって分かることではないでしょうか。主イエスは、特別気負って、わざわざ彼（か）の議員の度胆を抜くようなことを言われたわけではなく、ごくごく当たり前の、本当のことを言われただけのことなのです。それが、酷（ひどく）彼を悲しませたのは、彼には、富に対する、或いは、地位や名誉に対する、強い執着心があったからでした。

この時主イエスは、非常に悲しむ彼（か）の議員の姿を見て、「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」と言われました。主イエスが用いられる誇張法が、余りにも極端なので、これを少し和らげようとして、実は、エルサレムの町の裏通りには、“針の穴”と呼ばれる狭い入口があって、近道をするためか、そこから駱駝を無理に押し込んで、通ろうとする商人の姿が、当時よく見掛けられたようなのですが、それがここでは譬えに用いられているのだ、と考える人、或いは、駱駝と言うギリシャ語のスペルを少し書き換えると、ロープとかケーブルとか言う意味の言葉になり、ロープ、或いは、ケーブルを針の穴に通す、と、ここでは言っていのだ、と考える者もあるのですが、そうした解釈は、却って、主イエスの思いを損ねることで、時に主イエスは、極端に過ぎると思われる程の誇張法を用い、聞いた人々の心に深く真理を刻み込み、決して忘れることがないように、こうした手を使われた、と考えるのが、一番自然ではないでしょうか。

この時、これを聞いた人々は直に反応を示し、こう言いました。「それでは、だれが救われるのだろうか」と。すると主イエスもまた、直にこれに答え、「人間にはできないことも、神にはできる」と言われました。それは、嘘ではありませんでした。それは、直に証明されることになったのです。と言うのは、この次の章、ルカによる福音書１９章に入ると、先ず、最初に出て来るのは、「徴税人ザアカイ」の話だからです。彼のことは、「徴税人の

頭で、金持ちであった」と、２節では、そう説明されています。そんな彼が、主イエスに出会い、主イエスの愛に触れて、人が変わり、何と８節では、「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します」と、言い出すのです。人々から、守銭奴、売国奴と罵られ、蛇蝎のように嫌われ、そのため、人目を避けて、木に上り、葉陰に身を隠して、下を通り過ぎられる主イエスを一目見ようと、普通の大人なら恥ずかしくて、とてもできないような、実に、子供じみたことをやったのですが、主イエスは、そんないじらしいザアカイの行動を見逃されず、御自身の方から声を掛け、彼との交わりを求められたのです。全く偏見のない、キリストの純粋な愛に触れ、ザアカイは、これまで、しっかりと握りしめて、死んでも離さないだろうと、誰もが思っていた財産を、手放し始めたのです。キリストを知る絶大な価値に目覚めたからです。これこそ、正に、愛の奇跡です。

同じようなことは、主イエスの十二弟子に加えられることになったレビ、又の名をマタイと言った人物の身にも起こりました。この弟子のことは、ルカによる福音書５章２７節以下に出て来ました。彼も徴税人でした。彼が、お金持ちであったことは、主イエスの弟子となった直後、主イエスのために、自分の家を開放し、盛大な宴会を催し、そこに、これまで自分の仲間であった徴税人たちばかりでなく、ファリサイ派の人々やその派の律法学者たち、更には、彼らの目からすれば、律法を守らぬ不貞の輩、それを彼らは罪人と呼んだのですが、そうした者たちまでも、一切隔てなく、来る者は拒まずで、来る者すべてを招き入れたことからも、彼が、どんなに金持ちであったか、容易に想像がつくのですが、彼は、その全て、「何もかも捨てて立ち上がり、イエスに従った」（２８節）のです。あの盛大な宴会は、精一杯の主イエスへの感謝の捧げものでもあったのです。

今一人忘れることができないのは、パウロです。彼は、自分の生い立ちを誇って、フィリピの信徒への手紙３章５節以下で、「わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした」と言い、使徒言行録２２章３節では、「わたしは、キリキア州のタルソスで生まれ、・・・この都（エルサレム）で育ち、ガマリエルのもとで先祖の律法について厳しい教育を受け」た、と言い、同じ章の２８節では、千人隊長に、「わたしは生まれながらのローマ帝国の市民」です、と、言っているように、彼は、生まれながらにしてローマの市民権を持っていたのです。と言うことは、父親が名望家であったか、可成りの資産家であった、と言うことの何よりの証明です。だからパウロは、生涯三度にも亘って、世界伝道旅行を行うことができたのだと考えられます。彼は、輝かしい経歴も、親から相続した財産も、将来への確かな保証も、何もかも捨てて、主イエスに従ったのです。否、彼の場合、捨てたのは、この世の名誉や確かな将来への保証であって、その一切を、彼は、キリストのため、神に国のために、捧げ切ったのです。ここで、アルヴェルト・シュヴァイツァーのことが思い出されるのですが、或る人が彼に、「あなたはすべてを捨ててアフリカに行かれるのですね」と言ったところ、シュヴァイツァーは、「いや、捨てるのではなく、すべてを持って行くのです」と、答えたと言うのです。捨てるのは、この世の名誉や、安楽な生活や、将来への確かな保証であって、ただ、身に着けた経歴や財産の使い道が変わっただけのことなのです。その方が、遥かに尊い人生になる、と悟ったからでした。でも、そうした心の大転換、霊の目覚め、と言うものは、人間一人で出来るものではありません。やはり、神が促されたのです。神には、それがお出来になるのです。

この主イエスのお言葉に、直ぐに反応したのは、ペトロでした。「このとおり、わたした

ちは自分の物を捨ててあなたに従って参りました」と、彼が言うと、主イエスは、「誇ってはならない」と、諌められるか、と思いきや、思いに反して、却って寧ろ、更に、彼ら弟子たちを励ますように、こう言われました。「はっきり言っておく。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子供を捨てた者はだれでも、この世ではその何倍もの報いを受け、後の世では永遠の命を受ける」と。「後の世では永遠の命を受ける」と言う約束の言葉は、何の解説も必要なく、十分納得がいくのですが、「家、等々を捨てた者はだれでも、この世ではその何倍も受け」とは、果たして本当なのか、と、一瞬、私たちの心には、疑問がよぎります。教会に加わることによって、肉の関係ではなく、霊の関係が生まれ、失った家族関係の、何倍も深く、密なる、神の家族が与えられることを、主イエスは言われたのだ、と言う解釈があるのですが、使徒言行録に記された初代教会の姿は、確かに、そう言えるものでした。そして、今も、そう言える面があるとは思うのですが、それだけではなく、それ以上のことを、主イエスは言われたのだ、と見てよいのではないでしょうか。一度手放した肉の関係を、改めて、神の手から受け取り直すのです。以前は、運命的でもあり、当然の関係だったのですが、今度は、恵みとして、神からの贈り物として、再度、受け止め直すのです。今や、当然ではなく、恵みなのですから、そこには感謝が生まれます。また、お互いの自由を認め合うことができます。だから、大変、風通しの良い関係になります。重苦しさがなくなり、喜びが全体を包み始めます。主イエスは、それを、「何倍もの報い」と、言われたのではないでしょうか。見た所は、以前と何も変わらない、同じ家族関係が続いてはいても、意識はまるで変っているのですから、今や、その中身は、前と全然違ったものになっている、と、そう言ってよいのではないでしょうか。

いずれにしても、主イエスにお従いして、間違いはないのです。彼（か）の世では永遠の命が、この世では失ったものの何倍ものものが、約束されているのです。信じて、主の道を、最後まで、気を緩めずに、歩み通したいものだと思います。

（三輪恭嗣）